今回は鳥の名前の羅列に終わったかもしれないが、太平洋から日本海の間を地形と鳥の分布から山頂を中心に八つの地域をもつことができるのではないかと思う。河口、平地、内陸、森林山地、とでも分ければよいだろうか、距離の長短はあるが、鳥の生活状態はほぼ同じような地形を持っていて、住む鳥も太平洋側と日本海側で対象を成しているように思う。終始線的な観察しかできなかったが、以後の課題として、新しい経験ができたと思っている。

残　念　記

野村秀明

今回の、延々３１日間にもおよぶ日本列島横断航行合宿において、私一人だけが、みなと全行程の苦楽を共にすることが出来なかったのである。

忘れもしない7月３１日……合宿がはじまって１０日目、あの発狂しそうな、川を遡るという行程が終わり、これから、メインイベントである甲武信ケ岳に挑戦するという日の夜だった。

あの狂気の１０日間を無事に終えたのだという安堵感と、まだ全行程の半分も来ていないのかという絶望感とでも言うか、そんな複雑な気持ちで、明日からの甲武信ケ岳越えの準備をしていた。

厚い雲が月をすっぽりと覆い隠し、真暗で、霧雨の降る夜9時ごろだった。

そんなロマンチックな？　夜に事もあろうに、鋭く天を仰ぐコンビーフのカンの上を素足で歩いてしまったのである。

テント内では3人が寝ころんでおり、私は外で仕事をしていた。その時テント内より、灰ざらにするから空カンを取ってくれという声があり、私は何の気なしに、コンビーフの空カンを手渡してやったのである。

仕事も終わり、テントへもどり、みなと楽しい一時を過ごそうと入りかけると、もはや寝る用意をしており、3人が寄って寝ころんでいたため、私は反対側から入ったのである。

そして履物だけを、入口の方へもどしておこうと、足を3歩前へ運んだ途端、足に激痛を覚え思わずその場に倒れこんでしまったのである。かなり激しい倒れ方だったらしく、テントが傾き、ちょうど下にいた吉野君の顔面にも危害を及ぼしたらしい。

直感的に空カンをふんだなということはわかったが、他の3人には何事やらさっぱりわからず、吉野君によれば「どついてやろうか。」と一瞬思ったそうである。

激しい痛みをこらえて、傷の状態を見ると、かなり深く切れているのがわかった。

幅１０㎝、深さ５㎜～１５㎜の傷であった。

このメインイベントを明日にひかえ　、何故俺が、こんな所で……という、悔やんでも悔やみ切れない、何とも形容し難い苦悩に襲われた。

みなと行動を共にすることが出来ないのは、もはや確実であった。

俺が行動不可能になれば、この合宿はどうなるんだろうか。中止にでもなったら……そんな事を思うと、ここでこうしてうずくまっている自分がどうしようもなく腹立たしかった。

とにかく、ここでは満足な手当も出来ないということで、１００ｍ程離れた所にある雑貨屋まで行くことになる。

出血も激しく、やはり医者に見せた方が良かろうということになったが、なにしろ山裾の田舎なもんで、交通機関がなく仕方なく、救急車を呼ぶことになる。

例のピポーピポーピポーである。

それにしても、あの救急車の窓に流れる景色はまったくの悪夢であった。

今日、この昼間にみんなと声かけ合って歯をくいしばってがんばって登ってきた道を、何のためらいもなく、この車はスピードをあげて逆戻りするのであった。

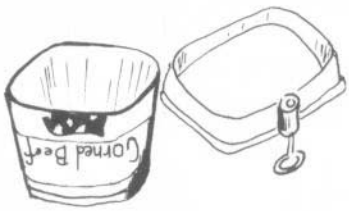
何の為に、重たいキスリングをかついで今日、俺はこの道を登ってきたんだろう。

せめて、もうちょっとスピードを落として戻ってくれ。こんなばかげた事を真剣に考え願う。

幸いにして合宿は続けられ、私も２週間の自宅療養の後、再び参加し、最後の一週間の苦楽を共にすることが出来た。

最終日の新潟での“打ち上げ”を出発時のメンバー全員で出来たということは、本当にうれしい事ではあるが、やはり、私一人全行程に加われなかったという疎外感はぬぐい去れない。思い出話をしても、あの２週間の話に入ると私一人話題がなくなるのである。

何の因果か、メンバー中唯一人タバコをやらないこの私が、灰皿がわりに手渡してやった空カンで自分の足を……。ついてないと言えば言えるのかも知れないが、何故か、このごろそうも思わないのである。メインイベントを前にして、山中ではなく山のふもと、それも人家に近い。ひょっとしてあのまま甲武信ケ岳へ行っていたら俺一人転落する運命にあったのかも知れない。ちょうどその日、どこかの山岳会員が、すぐ近くの東沢という所で転落し救急車で運ばれている（その人と同じ病院に私も運ばれた）のである。

誰かが、そういう私を救ってくれたのかも知れない。やはり私はこの世に必要な人間なのだ、そう思って一人満足しているこのごろである。

それにしても、あの病院での麻酔注射、いたかったなーっ。